

『無冤録述』検討一斑（八訂稿）
—江戸期及び明治警察史の一齣—

（令和 4（2022）年 8 月 8 日（月）現在）

〔目 次〕

（補正経緯）	1
1 はじめに	3
2 法医学書一斑	5
3 『無冤録述』検討	7
4 『無冤録述』内容検討	14
5 『無冤録述』諸版検討	15
6 『無冤録述』関連著作抄	17
7 その他（HP、漫画、韓国ドラマ等）	17
【附録】明治警察史コーナーHP 項目一覧（抄）	18
【関連事項】	19

（補正経緯）

- HP 初出：
- ・平成 22（2010）年 9 月 26 日（日）初稿作成
 - ・平成 22（2010）年 10 月 5 日（火）改訂稿作成
（山崎佐「検視史資料類纂〔55〕第 210、検視書及法医学書解題（5）5 変死傷検視必携 無冤録述」（『犯罪学雑誌』第 15 卷第 6 号（昭和 16 年 11 月刊）100～103 頁の件追加）
 - ・平成 22（2010）年 10 月 17 日（日）再訂稿作成
（瀧川政次郎「李公駁擲」『法史零篇』、三木栄氏の諸著作、小寺鉄之助編著『近世御仕置集成 限定版』等を追加）
 - ・平成 22（2010）年 10 月 24 日（日）三訂稿作成
（三木栄『補訂 朝鮮医学史及疾病史』（思文閣出版、平成 3 年 6 月 1 日刊）等で補正）
 - ・平成 22（2010）年 11 月 1 日（月）四訂稿作成
（三木栄「無冤録について」等補正その他）
 - ・平成 22（2010）年 11 月 10 日（水）五訂稿作成
（「警察学会」、山崎佐「明治前日本裁判医学史」の件等追加）
 - ・平成 23（2011）年 1 月 10 日（月）六訂稿作成
（冒頭に「(お断り)」を追加）

- ・平成 25 (2013) 年 3 月 5 日 (火) 七訂稿作成
(漫画『江戸の検屍官』(ビッグコミックス〔スペシャル〕、小学館) 1、2、3 刊行の件を追加。その他一部誤植訂正。)
- ・令和 4 (2022) 年 8 月 8 日 (月) 八訂稿作成
(レイアウトを全面変更し、副題を「江戸及び明治警察史の一齣」から改題するとともに、一部補正、追加した。)

(お断り)(平成 23 (2011) 年 1 月 10 日追加)

本稿の続稿について、本 HP で、別稿「続・『無冤録述』の初歩的検討—江戸及び明治警察史の一齣—」(HP 初出:平成 22 (2010) 年 12 月 6 日 (月) 初稿作成)を作成した〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/muenrokujutsuzoku.pdf>〉。両稿は、いずれ一つに整理する予定であるが、現時点では、諸般の事情もこれあり、併載せざるを得ないことをお断りしておく。

なお、平成 23 年 1 月 10 日、さる識者より、下記の御教示を受けた。厚く御礼申し上げるものである。

「台湾的歴史學界也有人開始研究法醫囉 (中國的)
從「檢驗」到「法醫」:近代中國法庭檢驗知識的演變
張哲嘉博士 中研院近代史研究所」
張哲嘉博士:

〈<http://www.mh.sinica.edu.tw/UserDetail.aspx?userID=75&mid=16&tmid=2>〉

1 はじめに

検視問題は、我が警察史上検討を要するすぐれて重要な課題の一つである。ちなみに、これに関する最近の文献として、例えば、倉木豊史氏（(当時) 警察庁刑事局捜査第一課検視指導室長）「犯罪死見逃し防止の観点から見た死因究明制度の現状と課題」『警察学論集』第63巻9号（平成22年9月10日刊）21～47頁がある。

本分野については、江戸時代に、中国元代の有名な法医学書、検屍報告書である『無冤録』¹の国内向け摘訳書として『無冤録述』が刊行され、爾後、同書が大いに利用されて、明治中後期に至っている。

この『無冤録述』に関し、最近さる識者が御秘蔵の明治中葉に警察監獄学会が活字本として出版した『変死傷検視必携 無冤録述 完』（明治24（1891）10月23日刊）²の複製を作成されたが、幸いにも、先般、その一本の恵投に与った。

そこで、これを承け、その後、同書及び警察監獄学会について、甚だ不十分ではあるが知り得たことを、一、二記載しておくこととする³。ただし、うち、警察監獄学会に関して

¹ 識者によれば、現在では、『無冤録』（『無冤録述』）の「冤」は、「冤」でも、どちらでも差し支えないとされるので、ここでは、原典に従い、「冤」を使用することとする（平成22年10月17日追加、同年10月23日一部修正）。

² 本『変死傷検視必携 無冤録述 完』（奥付に「警察監獄学会蔵書」とある。発行人：東京市四谷区荒木町廿二番地 磯村允貞、明治24年10月23日刊）は、江戸時代刊行の『無冤録述』を初めて活字化したものであるが、新たに、カタカナを平かなに変え、章立て、見出しその他を施している。同書につき、現在所蔵が知られるものは、国立国会図書館本及び矯正図書館本の二冊である。今回の複製本は、おそらく国会図書館本に拠るものと推測されるが、矯正図書館本（ネットでの検出題名：『変死傷検死必携 無冤録述』）の刊行は、「明治34（1901）年刊（326.7-To-7697）」とのことである（未見。下記のように、これは六版である。）。なお、同書には、同書自体の序文、跋が付されていないが、識者によれば、当時の『警察監獄学会雑誌』にその刊行広告が出ており、刊行理由等が多少記載されている由である。ただし、諸般の事情から、現時点では、これも未見なりしことを遺憾とする。

（追記）：山崎佐（1888～1967）「検視史資料類纂〔55〕 第210、検視書及法医学書解題（5）5 変死傷検視必携 無冤録述」（『犯罪学雑誌』第15巻第6号〈昭和16年11月刊〉100～103頁参照。詳細は後日追加予定であるが、例えば、同論稿に拠れば、明治34年刊行の同書六版は、「発行人が東京市四谷区愛住町二番地磯村政富、発行所が警察学会に変わって居るだけである。」（101頁3段）とのことである。（平成22年10月5日追加、同年11月3日一部修正）

³ ちなみに、差し当たりの検討課題としては、例えば、次のようなことが考えられる。

- ・ 往時の法医学書には如何なるものがあったのか？
- ・ 『無冤録』及び『無冤録述』の文献的検討如何？
- ・ 『無冤録述』訳者「泉州 河合甚兵衛源尚久」とは誰ぞ？何故同人の詳細が不明なのか？
- ・ 警察監獄学会とは何ぞ？『変死傷検死必携 無冤録述』六版発行所の警察学会との関係は如何？（平成22年年11月3日一部修正）
- ・ 明治24（1891）年10月警察監獄学会刊行本（『変死傷検視必携 無冤録述 完』（磯村允貞、明治24年10月23日刊））とは何ぞ？、いつまで刊行されしか？
- ・ 「発行人：東京市四谷区荒木町廿二番地 磯村允貞、印刷人：東京市四谷区荒木町廿二番地 近藤釦二

は、もとより当時刊行されていた『警察監獄学会雑誌』⁴を見る必要があるが、諸事情あって、同誌を現在ただちに見ることができないため、後日を期することとする。

本稿作成に当たっては、上記識者、高橋均先生、花田富二夫先生及び梁添盛博士より、御懇篤な御示教に与った。ここに、謹んで深甚の謝意を表するものである。

(追記)

本稿関連の法医学書について、その後、知人より、日本学士院編『明治前日本医学史』第5巻⁵(日本学術振興会、昭和32年1月15日刊)所収の山崎佐(たすく、1888~1967)

郎」とは誰ぞ? ⇒「東京市四谷区荒木町廿二番地」は、当時の警察監獄学会所在地か? 六版発行「発行人 東京市四谷区愛住町二番地磯村政富、発行所 警察学会」は何ぞ?

・国立国会図書館近代デジタルライブラリー: <<http://kindai.ndl.go.jp/>>で、「警察監獄学会」を検索すると、10件検索できるが、警察監獄学会はいつまで存在したのか? ちなみに、監獄行政は、当初内務省所管であったが、明治36(1903)年3月、監獄官制が公布され、すべての監獄は司法省の直轄するところとなっている。

・『警察監獄学会雑誌』は、明治23(1890)~25(1892)年刊行分を確認でき、後継雑誌は、『監獄協会雑誌』との由。⇒国会図書館所蔵分は平成22年9月現在ではマイクロ化作業中で閲覧できず、矯正図書館所蔵分はすぐには見に行けない。⇒よって、検討は他日に譲る。

・警察監獄学会刊行本は、例えば、国立国会図書館近代デジタルライブラリーでは、大正7(1918)年刊の下記『探偵術問答』まで閲覧できるが、同書奥付によれば、編纂者の警察監獄学会について「右代表者兼発行者 横尾留治」とある。「横尾留治」は松華堂主人³であることからして、この頃の警察監獄学会は、既に名目上のものか?。なお、本HP別稿「松華堂乃至松華堂書店とは何ぞや—明治警察史の一齣—」(HP初載:平成21(2009)年6月22日初稿作成)

<<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shokado.pdf>> 参照。

「タイトル: 探偵術問答 タイトルよみ: タンテイジュツ モンドウ 責任表示: 警察監獄学会編 出版事項: 東京: 松華堂, 大正7形態: 317p; 15cm NDC分類: 317.7」

・また、警察学会刊行本については、例えば、国立国会図書館近代デジタルライブラリーに拠れば、加藤正雄(?~?)・太田政弘(1870~1951)著『警察官練習要書』(2版、警察学会、明治33年11月16日刊。初版:明治32年7月15日刊)がある。発行者は、「東京市四谷区愛住町二番地 磯村政富」発行所は、「東京市四谷区愛住町二番地 警察学会」である。これからすると、この時点で、警察監獄学会とは別に、警察学会なるものがあることがわかる。磯村氏一族によるものは、おそらく、警察監獄学会から警察学会に変っているのではないかと思われる。(平成22年11月3日追加)

⁴ 『警察監獄学会雑誌』の刊行年月は第1巻第1号(明治23年3月刊)~第3巻第10号(明治25年6月刊)で、継続後誌は、『監獄学雑誌』(警察監獄学会、第3巻11号(明治25年5月刊?)~)との由である。かなり以前に、ヘーン大尉(1839~1892)、松井茂久(1862~1890)各検討の過程で、同誌を閲覧したことがあった。

ヘーン大尉関係: <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/hoen001.pdf>>、松井茂久関係: <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/matsui002.pdf>>

⁵ 同書については、下記復刻本あり(未見)。『明治前日本醫學史』(日本学士院明治前日本科学史刊行会編、増訂復刻版、東京 日本古医学資料センター 東京 井上書店(発売)、昭和53年6月刊 5冊 第5

「明治前日本裁判医学史」の「後編 裁判医学後史 第5章 江戸時代 第5節 検驗に関する書籍 第1項 伝来書 第2項 日本書」201～233頁に詳述されていることを教示された。ついで、本稿は、これに基づき、全面的に書き直す必要があるが、目下そのゆとりもなきため、当面は、旧稿の部分的補正のままで進めることとする。(平成22年11月10日追記)

2 法医学書一斑

(参考)

・「医学書の一覧」

〈 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%BB%E5%AD%A6%E6%9B%B8%E3%81%AE%E4%B8%80%E8%A6%A7>〉

・「元老院版 無刑録 序解・小序集」

〈<http://www.ashitouzan.net/TEXT/zyokai.html>〉

・芦東山 (1696～1776)

〈 <http://www5d.biglobe.ne.jp/comenble/kamatahp/miyazaki/siseki/jinbutu/touzan.htm>〉

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8A%A6%E6%9D%B1%E5%B1%B1>〉

(1) 『洗冤録』(『洗冤集録』)

・世界最初の法医学書、中国南宋時期 1247年刊行、著者は宋慈(宋恵父、1186～1249)、清朝時に諸例を補注した『補注洗冤集録證』を刊行。1779年仏訳本、1853年英訳本、1863年蘭訳本、1908年独訳本各刊行。

・nacsis webcat

洗冤集録 / 宋慈著 ; 石山昱夫 (いくお、1931～) [ほか] 訳 . 洗冤録詳義 / 許榿著 ; 石山昱夫 [ほか] 訳 <xi yuan ji lu . xi yuan lu xiang yi>. -- (BN06067848) 北京 : 群衆出版社, 1990.8 353p ; 27cm 注記: 監修: 石山昱夫, 和中年 ISBN: 7501405077 著者標目: 宋, 慈 (1186-1249) <song, ci> ; 許, 榿 <xu, lian> ; 石山, 昱夫 (1931-) <イシヤマ, イクオ> 分類: NLM : W700

・西丸與一 (1927～) 監修、徳田隆 (1950～) 訳『中国人の死体観察学 『洗冤集録』の世界 宋慈』(雄山閣出版、平成11(1999)年8月5日刊)

『洗冤集録』:

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B4%97%E5%86%A4%E9%9B%86%E9%8C%B2>〉
宋慈: 〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%8B%E6%85%88>〉

・『洗冤録』につき、瀧川政次郎 (1897～1992) 「李公驗擲」『法史零篇』(新京・五星書林、康徳10(昭和18)年9月25日刊) 224～228頁をも参照。(同書については、今般(平成

巻 注記: 日本学術振興会、昭和30-39年刊の複製 ; 復刻に当たり各巻に人名総索引、物件総索引追加)
(平成22年11月10日追加)

22年10月9日)、小林宏先生の御示教に与った。誌して、深甚の謝意を表するものである。) (平成22年10月17日追加)

瀧川政次郎:

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%80%A7%E5%B7%9D%E6%94%BF%E6%AC%A1%E9%83%8E>〉

(2) 『平冤録』

・上記『洗冤集録』の改訂版という。趙逸齋が校訂。

・〈http://tc.wangchao.net.cn/baike/detail_1204477.html〉

平冤録 法醫學著作。無名氏撰，趙逸齋訂。一卷。作者以南宋宋慈《洗冤集録》爲藍本，結合自己的經驗寫成。書中列檢覆總說、驗法、勒死、自縊死、落水投河死、棒毆死，及傷死、拳手足踢死等共43項。內容有獨到之處，若幹論述也合科學原理。如認爲人死後胸腹部變爲青色，是內腹內汙穢（腐敗氣血）發作攻注皮膚而起，不是生前其他原故所致。本書對元王與編寫《無冤録》起一定的作用。（王朝網絡 wangchao.net.cn）

・nacsis webcat

洗冤録 不分卷 / (宋) 宋慈撰 . 平冤録 不分卷 <xi yuan lu . ping yuan lu>. -- (BA67741393) (: 私製) 1冊 ; 15×21cm

注記: 洗冤録: 明刊本 ; 平冤録: 萬曆中金陵書坊王慎吾重刊本 ; 東京大学東洋文化研究所蔵資料より複製

所蔵図書館 1 東大東文 図書 大木文庫:法;獄訟:檢驗 1 6401819526

・未見ではあるが、董炳然「平冤録」『犯罪学雑誌』第4巻第1～4号、第5巻第1～2号があると聞く。（平成22年10月24日追加）

(3) 『無冤録』及び『無冤録述』

『無冤録』は、上述のように、中国元代の法医学書。王與（王与、おうよ、1260～1346）⁶が、上記宋代の宋慈『洗冤録』及び趙逸齋『平冤録』を参考に編輯したもので、武宗の至大元（1308）年に刊行されている。明代（1384年）に朝鮮に渡り、『新註無冤録』（正統3（1438）年10月序文、正統5（1440）年1月初刊。）、『増修無冤録』（英祖24（1748）年

⁶ 王與 〈<http://yibian.hopto.org/dct/?dno=130>〉

「名醫録（283位） ... 朝代 筆劃 ヱタロ 部首 搜尋

醫家 王與 年代 元 1260～1346 内容 | 我的觀點 | 他人觀點

浙江温州人。著名法醫學家。王與少年好學，尤重法律，軍方弱冠，任郡功曹，從事勤敏。歲逢荒年，守承惘然無措，經王與努力，散放官米，使民得活。後升任杭州路鹽官，州提控案牘，經常參加驗尸，積累了豐富的經驗。州路總管知事，後轉任湖州錄事，請老，終於承直郎温州路樂清縣尹。王與一生精明法律，著有《無冤録》、《欽恤集》、《禮防書》、《刑名通義》等書，為從政者多所取法。《無冤録》一書，蜚聲中外。王與退休後，居於永嘉縣，頗受鄉里愛戴，有力所不及求於公者，無不給以幫助，終於至正六年（1346），年八十有六，葬于家鄉馬岙。」

刊)、『増修無冤録諺解』(正祖 16 (1792) 年刊)、『増修無冤録大全』(正祖 20 (1796) 年刊) となって現われる⁷。更に、日本に入り、このうち、『新註無冤録』が、江戸中期の元文元 (1736) 年に、泉州の河合甚兵衛尚久 (? ~?) により一部が日本語に訳され、それが、明和 5 (1768) 年に『無冤録述』二巻として刊行される。なお、『増修無冤録大全』は、日本に影響するに至らなかったという⁸。(この段、平成 22 年 10 月 24 日一部修正)

これが、日本に於ける最初の法医学書ともいべきもので、明治 40 年代まで重用されたという⁹。なお、富士川游 (1865~1940) 『日本医学史』(裳華房、明治 37 年 10 月 23 日刊) 523、524 頁を見ると、『無冤録』の編纂、伝来過程については、明和 5 (1768) 年刊本『無冤録述』の「跋」が貴重と思われるが、遺憾ながら、同明和 5 (1768) 年刊本は未見である。ただし、これは、寛政 11 (1799) 年求版本冒頭にある「序文」が、まさにその再録かと思われるので、下記に掲載しておく。(コト：合略仮名「コト」。嘉永 7 (1854) 年版本にも冒頭に掲載されているが、一部文字の異同がある。)

3 『無冤録述』検討

⁷ 朝鮮における『無冤録』については、三木栄氏 (1903~1992) に多くの論著がある。例えば、夙に「無冤録に就て (1)」『中外医事新報』第 1152 号 (昭和 4 年 10 月 28 日刊) 499~509 頁、「無冤録に就て (2)」『中外医事新報』第 1153 号 (昭和 4 年 11 月 28 日刊) 601~607 頁、「無冤録に就て (3) [完]」『中外医事新報』第 1154 号 (昭和 4 年 12 月 28 日刊) 656~660 頁及び「新註無冤録攷」『中外医事新報』第 1163 号 (昭和 5 年 9 月 28 日刊) 433~444 頁 (以上は、日本医史学会編『日本医史学雑誌 (旧称中外医事新報)』(思文閣出版、昭和 5 年^③: 昭和 53 年 8 月 30 日刊、昭和 6 年^④: 昭和 53 年 9 月 30 日刊) として復刻されている。) があり、代表的なものとして、『補訂 朝鮮医学史及疾病史』(思文閣出版、平成 3 年 6 月 1 日刊) がある。同書 137、138、219、233~236、321、371、401 頁各参照。これらについては、後日検討の予定である。なお、三木氏は、朝鮮における『無冤録』の改修刊行の過程につき、李英沢『無冤録の研究』に基づくとされておられる (『補訂 朝鮮医学史及疾病史』234 頁下段) が、これは、おそらく、同書巻末の「引用文献、主要引用文献」24 頁下段にある李英沢「近世朝鮮の法医学的裁判と無冤録の研究」(ソウル大学校論文集、自然科学第一輯) のことと推測される。ただし、同書は、ソウル刊本でもあり、詳細不明である。

三木氏につき、<<http://kotobank.jp/word/%E4%B8%89%E6%9C%A8%E6%A0%84>>、

<<http://mayanagi.hum.ibaraki.ac.jp/paper04/mikisensei.html>> 等参照。(平成 22 年 10 月 17 日追加、同年 10 月 24 日一部修正、同年 11 月 1 日一部修正)

⁸ 三木栄『補訂 朝鮮医学史及疾病史』(思文閣出版、平成 3 年 6 月 1 日刊) 321 頁下段

⁹ 出処不明であるが、下記サイトによれば、『無冤録述』は、明治 43 年頃まで刊行、使用されていたようである。<<http://www.osoushiki-plaza.com/institut/dw/199104.html>>

「江戸時代の検験のテキスト 日本でできた検験のテキストはまず『無冤録述』があげられる。このテキストは 1308 年、元朝で編纂されたものである。その後朝鮮を経由して日本では 1736 年に日本の状況に合わせて翻訳され、明治 43 [マ、34] 年頃まで幾度も刊行され用いられていた。『無冤録』は上下からなり、題名の「冤」とはぬれぎぬのことである。上巻では肉体の部位とその名称および、検視にあたっての心がまえ、注意点が述べられている。下巻では 31 の死因とその死体に現われた特徴が記されている。」

この「明治 43 [マ、34] 年頃まで」は、上記『変死傷検視必携 無冤録述 完』(明治 24 (1891) 10 月 23 日刊) の第 6 版が明治 34 (1901) 年 2 月刊であることを指す。なお、朝鮮では、隆熙 3 (明治 42、1909) 年まで使われていたという (前掲三木 栄「無冤録に就て (1)」『中外医事新報』第 1152 号 (昭和 4 年 10 月 28 日刊) 509 頁)。いずれにせよ、このあたり、興味深い問題であり、今後更に検討の要ありと認められる。(平成 22 年 11 月 1 日及び同年 11 月 10 日一部修正)

(1) 富士川游 (ふじかわ、1865～1940) 『日本医学史』 及び 『日本医学史綱要』

- ・ (参考) HP 「江戸時代の検視テキスト」 (1991.04)

〈<http://www.osoushiki-plaza.com/institut/dw/199104.html>〉

- ・ 富士川游 (1865～1940)

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AF%8C%E5%A3%AB%E5%B7%9D%E6%B8%B8>〉

(富士川英郎氏 (1909～2003) は四男、富士川義之氏 (1938～) は英郎氏三男)

- ・ 京都大学附属図書館所蔵 「富士川文庫目録」

〈<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/fuji/mu.html>〉

阿知波五郎 (あちわ、1904～1983) 「京大・富士川本について」 『富士川游著作集』 第 7 卷 (思文閣出版、昭和 55 年 7 月 20 日刊) 月報 31～3 頁及び同月報所載「雑録」 (京大本の由来あり。) 7、8 頁参照。

・ 富士川游 『日本医学史』 (裳華房、明治 37 年 10 月 23 日刊。決定版: 日新書院、昭和 16 年 4 月刊。その後の各版につき nacsis webcat 参照。)

- ・ 裳華房: 〈<http://www.shokabo.co.jp/history.html>〉

・ 『日本医学史』 は近代デジタルライブラリー 〈<http://kindai.ndl.go.jp/>〉 に掲載 「第 8 章 徳川時代の医学 中期 (徳川氏中世) 紀 法医学科」 (522～527 頁)

・ 〈<http://1gen.jp/kosyo/054/mokuji.htm>〉 は、上記近代デジタルライブラリーを許可転用したものか。極めて検索しやすい。ただし、ここでは、入力は省略する。

・ 富士川游 『日本医学史綱要』 (克誠堂書店、昭和 8 年 6 月刊) ⇒ 『日本医学史綱要 1』 (平凡社、昭和 49 年 8 月 28 日刊、東洋文庫 258 (小川鼎三 (1901～1974) 校注)) 「第 8 章 江戸時代の医学 江戸時代中期 法医学科」 (181～182 頁) (なお、『日本医学史綱要 2』 (平凡社、昭和 49 年 11 月 11 日刊、東洋文庫 262 (小川鼎三 (1901～1974) 校注)) あり。)

(〔 〕: 原著者注、(): 校注者注、[]: 編者注)

「(181 頁) 法医学科 大宝の律令に定められたる条項にして、その実施に際して、こんにち吾人がいうところの法医学的知識を必要とせるもの少なからず。しかもその司獄に関する医官の制なかりしより考うれば、医学はこの際には応用せられず、したがって法医学の研究は未だその緒に就かざりしことは推知せらるべし。鎌倉・室町両時代を経て、江戸幕府時代に至るまで、おのおの刑法の制定ありて、法医学の必要は認められしも、我が邦に

始めてこの科ありしは、^{むえんろく} 『無冤録』 が支那より輸入せられたるより以来のことなるべし。

[一行空け]

* 『無冤録』 は、支那の元の武宗の至大元年〔西暦一千三百八年に当たる〕 [我が延慶元年] に、王与 [王與] が、これより先すでに世に行なわれ居たる 『洗冤録』 および 『平冤録』 の二書を折衷し、獄事検驗の方則を詳述したるものにして、粗鹵 [そろ] ながらも、法医学書の体裁を備えたるものなり。この書の我が邦に入りたるは何れの時代なるやを詳らかにせずといえども、明和五年 [一七六八年] に刊行せられたる 『無冤録述』 の跋に「斯邦

嚮 [さき] に無冤録と云へる書を印行せり。これ元の王氏編輯する所にして、朝鮮国の諸学士音註を加ふる所なり。斯邦に翻刻せるは、何れの年、何某刻せると云ふこと審ならず。且つ版も丙王の災 [不詳。あるいは、「火事」のことか。] に値ひけるにや今は見ること鮮し」とあり。その頃すでに見ること鮮なしと云える刊行本の『無冤録』には正統三年 [我が永享十年 (西暦一四三八年)] の序文あり。よりにて推考するに、この書の我が邦に入りしは室町時代 [1336~1573] の末なりしならん。しかもこの書が訓点を施して翻刻せられ広く世に行な / (182 頁) われるに至りしは、それより遙かに後のことなるべし。

『洗冤録』は宋恵父 [宋慈] の編述するところ、『平冤録』は趙逸齋の校訂せるところにして、著作の年代は古く宋時代にありといえども、その我が邦に入りしは、かえって両書を折衷して編述せるところの『無冤録』に後れたるものの如し。ことに『無冤録』は、元文元年 (西暦一七三六年)、泉州の河合尚久が、これを鈔訳して、『無冤録述』二巻として梓行せしよりして広く世に行なわれたり。

『無冤録』等の諸書に記述するところは、獄を断ずるにあたりて最も必要とするところの検屍に関するところにして、検屍は一定の順序を立て、しかして勒死 [人に絞め殺されたるもの] と自縊とを鑑別し、水に落ちて死したるものと打ち殺して水中に投じたるものとを区別し、また創傷の生前に生ぜるものと死後に生ぜるものとを鑑別すること等を始めとして、災死、頓死、中毒死等につきて論述したり。」

(2) 尾佐竹猛 (1880~1946) 『「無冤録述」 解題』 (『刑書珍書集 (2) 近代犯罪科学全集 第 14 篇』¹⁰ (武俠社、昭和 5 年 8 月 15 日刊) 1~2 頁に拠る。)

(() : 原著者注、[] : 編者注)

「(1 頁) 支那に於ける最も古い法医学的な書に、『疑獄集』『内恕録』などいふものがあつたとのことであるが、これ等は伝はつて居ない。今日見る事を得る最も古い書は『洗冤録』である。この書は宋の淳祐年間 (西紀一二四七年) に、宋慈が右の二書を基礎とし、これに自己の経験を加へて記述したので、爾来実務家の金科玉条となつたのである。十三世紀に於て、この科学的書の出たのは以て世界の法医学界に誇るに足るのである。次いでこの書を参酌して、趙逸齋の『平冤録』が出で、更に以上の二書を基礎とし、修正増補を加へたのが、王与の『無冤録』であり、武宗の朝 (西紀一三〇八年) に完成し、洗冤録の完成と見て可なるのである。これが朝鮮 [高麗: 918~1392 年、李氏朝鮮: 1392~1910 年] に入り、正統三年 (西紀一三九三年 (マ)、一四三八年) 崔致雲の『無冤録註』『新註無冤録』のことか? となり、正祖二十年 (西紀一七九六年) に『増修無冤録』 [同書は英祖 24 (1748) 年刊]、その後、『増修無冤録諺解』 (正祖 16 (1792) 年刊)、『増修無冤録大全』 (正祖 20 (1796) 年刊)] が出た。これ等の書が我国に伝はり、元文元年 (西紀一七三六年) 泉州、河合甚兵衛尚久が、我国に適應さるべき様修正し、明和五年 (西紀一七六八年)

¹⁰ 同書の復刻方法、解題について、下記山崎佐 (たすく、1888~1967) 「検視史資料類纂 [55] 第 210、検視書及法医学書解題 (5) 5 変死傷検視必携 無冤録述」 (『犯罪学雑誌』第 15 巻第 6 号 (昭和 16 年 11 月刊) 100~103 頁の批判参照。(平成 22 年 11 月 1 日追加)

に出版したのが、本 / (2 頁) 書に採録した分である。今日から見れば不完全なものではあるが、旧幕時代には実務家の唯一の参考書であり、検視心得とかいふ風の執務書は大部分、この書に基づいて居り、また明治初年の執法官にも盛んに読まれたのである。また実際今日読んでも可なり参考になることが多いのである。

支那では洗冤録以後、『洗冤録箋註』とか『洗冤集録』或は『洗冤録集証』といふ類の書が多く出で、洗冤録を祖述し、これを増補大成したものが、今猶ほ盛んに出版せられて居る。就中光緒十八年(西紀一八九二年)出版の『補註洗冤録集証』は最も詳細であるから、これを採録する予定であつたが、紙数の都合上、遺憾ながら割愛した。」

(3) 山崎佐(たすく、1888～1967)「検視史資料類纂〔55〕第210、検視書及法医学書解題(5)5 変死傷検視必携 無冤録述」(『犯罪学雑誌』第15巻第6号(昭和16年11月刊)100～103頁(平成22年10月5日追加)(詳細後日追加予定))

山崎 佐: <<http://kotobank.jp/word/%E5%B1%B1%E5%B4%8E%E4%BD%90>>

(以下、平成22年10月17日追加)

山崎佐氏については、追って検討の予定であるが、差し当たり、江尻進(1908～1996)編『思い出に綴られる山崎佐の生涯』(江尻進発行、昭和43年2月20日刊)参照。なお、同書所収の奥野彦六(1895～1979)「法制史学会における故山崎佐先生について」(初出:『法制史研究』18(昭和43年10月20日刊)217～219頁)、三木栄(1903～1992)「日本と朝鮮の裁判医学」(289～291頁。初出:『医譚』通号第36号(昭和42年12月刊)14～15頁)をも併照。上述のように、三木氏には、朝鮮医学史についての多くの論著があることから、同氏についても、後日取り上げることとしたい。(平成22年11月10日一部修正)

(4) 『無冤録』及び『無冤録述』版本検討

ア 中国刊本(上述)

・中国本(唐本)一元代に王與(王与)著述、至大2(1308)年刊。明版『無冤録』洪武17(1384)年刊。

イ 朝鮮刊本(上述)

・朝鮮本一『新註無冤録』(世宗20年、正統3(1438)年10月の序文あり。正統5(1440)年1月初刊。)、『増修無冤録』(英祖24(1748)年刊)、『増修無冤録諺解』(正祖16(1792)年刊)、『増修無冤録大全』(正祖20(1796)年刊)(平成23年10月24日一部修正)

・朝鮮における『無冤録』については、三木栄氏(1903～1992)に多くの論著がある。例えば、「日本と朝鮮の裁判医学」江尻進(1908～1996)編『思い出に綴られる山崎 佐の生涯』(江尻 進発行、昭和43年2月20日刊)289～291頁、「東洋の法医学」『医史研究六十年著作目録 付略歴』(自己出版、平成2年11月25日刊)10頁及び『補訂 朝鮮医学史及疾病史』(思文閣出版、平成3年6月1日刊)137、138、219、233～236、321、371、401等参照。これらについては、後日検討の予定でいる(平成22年10月17日追加、同

年 10 月 24 日一部修正)。

三木栄: <<http://kotobank.jp/word/%E4%B8%89%E6%9C%A8%E6%A0%84>>

<<http://mayanagi.hum.ibaraki.ac.jp/paper04/mikisensei.html>>

・真柳誠 (1950～、茨城大学人文学部教授) 「日韓越の医学と中国医書」

<<http://mayanagi.hum.ibaraki.ac.jp/paper01/MedJpKrVn.html>>

「日本版韓籍：7種・12回 (中略) 6) 崔致雲『無冤録述』2巻 (1440初版『新註無冤録』下巻の摘訳):3版 (1768 [明和5年], 1799 [寛政11年], 1854 [嘉永7年])」(※1440年→中国 正統5年、日本 永享12年)

なお、「1440初版『新註無冤録』とあるが、上記「正統3(1438)年10月序文」との関連は如何については、正統3年11月完成、正統5(1440)年正月原州で初刊との由である¹¹⁾。

ウ 江戸時代刊本

・中国本(唐本)一元代に王與(王与)著述(1308年刊)、明版『無冤録』洪武17(1384)年刊。

・朝鮮本一『新註無冤録』(世宗20(1440)年刊)、『増修無冤録』(英祖24(1748)年刊)、『増修無冤録大全』(正祖20(1796)年刊)(平成22年10月24日修正)

・以上のどれかが日本に渡来。唐本も朝鮮本(『新註無冤録』)も可能性あり。

・和刻本一上記渡来本を基に、日本で和刻された。

・長沢規矩也(1902～1980)『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』(汲古書院、平成18年3月刊)にはなし。

・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』(1～3、索引)(井上書房、1 昭和37年12月25日刊、2 昭和38年6月10日刊、3 昭和38年10月25日刊、索引 昭和39年4月15日)で確認すると、既に寛文10年(1670)以前には出版されていることが判明する。

寛文十(1670)年刊書籍目録 「故事」の部「無冤録 二冊」(1-82頁2段目)

寛文十一(1671)年刊書籍目録 「故事」の部「無冤録 一冊」(1-132頁4段目)

同様に、延宝三(1675)年刊(「故事」の部、二冊、1-185頁2段目)、元禄五(1692)年刊(「故事」の部、二冊、1-268頁4段目)、元禄十二(1699)年刊(「故事」の部、二冊、2-29頁3段目)各書籍目録にも記載あり。

また、天和元(1681)年刊「書籍目録大全」には「む 儒書」の部に「二冊 無冤録 東甌王氏(「王與」のこと)七匁」と値段も書き込まれている(2-184頁5段目)。

更に、「元禄九(1696)年刊書籍目録大全」には「二冊 無冤録(ベンロク) 東甌王氏(「王與」のこと) 五匁」とあり、「白人板」(素人出版の意か)とある。「宝永六(1709)年刊書籍目録大全」(2-282頁2段目)によると、「二冊 無冤録(ベンロク) 東甌王氏(「王與」のこと) 六匁」とあり、出版元が「林九」と注記されている。「林九」は「林九兵衛」か「林九郎兵衛」と推測される。前者は文会堂と称し、林義端とも言って小説類

¹¹⁾ 三木栄『補訂 朝鮮医学史及疾病史』(思文閣出版、平成3年6月1日刊)137頁(平成23年10月24日追加)

をも刊行した有名な書肆である。「正徳五（1715）年書籍目録大全」（3-38 頁 1 段目）も「宝永六（1709）年書籍目録」（2-282 頁 2 段目、無冤録（ヘンロク））と同じ記述である。

・以上からすると、『無冤録』は、寛文十（1670）年以前の江戸時代初期から、早くに、我が国で、唐本、朝鮮本を基に刊行され、宝永頃まで刊行が続けられたかなり著名な書物であったことが判明する。

・また、全文の和訳本（例えば『新註無冤録和解』なる二冊写本は、江戸上期、中期の間になった由）も存在したという¹²。（平成 22 年 10 月 31 日追加）

・これらを経て、元文元（1736）年泉州の河合甚兵衛尚久が重要な箇所のみを抜粋し、訓読・翻訳をなし、それが、明和五（1768）年に『無冤録述』の題名で刊行されたものである。ちなみに、「明和九（1772）年刊書籍目録」には、「二冊 無冤録述 河井甚平（マ）」（3-198 頁 4 段目）なる記載がある。

・以下、『補訂版 国書総目録』第 7 卷（岩波書店、平成 2 年 9 月 6 日刊（昭和 45 年 9 月 14 日第 1 刷刊））で、『無冤録述』の刊行を跡付けておく。なお、江戸期の出版書肆については、例えば、井上隆明（1930～）『改訂増補 近世書林板元総覧』（青裳堂書店、平成 10 年 2 月 28 日刊）等が便利とのことである。

・明和五（1768）年初版本

大谷大学、京都大学、栗田文庫（現存せず。栗田元次旧蔵書）に所蔵。江戸 丹波屋理兵衛板（利兵衛とも書く場合がある。）、あるいは、丹波屋理兵衛（利兵衛とも書く場合がある。）と江戸 須原屋嘉助の合刊本か。丹波屋理兵衛は、文林堂、人見氏。もと大坂久宝寺町の住居であったが、後、宝暦十二（1762）年頃に江戸に移転し、明和五（1768）年には江戸で営業していた（『改訂増補 近世書林板元総覧』461 頁）。須原屋嘉助は、藻雅堂、舟木氏。江戸駿河町、日本橋平松町などが住所（『改訂増補 近世書林板元総覧』386 頁）。

・寛政十一（1799）年再版本¹³

江戸 前川六左衛門版（崇文堂） 内閣文庫、京都大学、早稲田大学、東北大学狩野文庫、岩瀬文庫など所蔵。ちなみに、同版序文最後にある「明和五年戊子初秋日 東都 崇文堂識」の「東都 崇文堂識」は、崇文堂が再版（求版）の時に入れたものである。序文の文章や「明和五年戊子初秋日」などが初版時のものか。崇文堂とは、前川六左衛門のことである。再版（求版）本書肆が、初版のものに、自分の記名のみをすることは、往々にしてあるとのことである。

・同書によると、前川の住所は、江戸日本橋南三丁目にあり、文化頃には南鞆町に移転している。商標は井筒に六または八の字を書き、唐本や和本、仏書なども扱った書物問屋として有名な書肆であった（『改訂増補 近世書林板元総覧』676 頁）。

・嘉永七（1854）年三版本

九大、東大など多数に所蔵。

・『無冤録述』については、江戸期に、以上の三版（明和 5（1768）年初版、寛政 11（1799）

¹² 三木栄『補訂 朝鮮医学史及疾病史』（思文閣出版、平成 3 年 6 月 1 日刊）321 頁下段

¹³ 請求記号:ワ 04 01597 出版書写事項:寛政 11[1799] 松村九兵衛, 浪花(大坂) 形態:2 冊 ; 25cm 序題:新註無冤録 序:山叟ほか 東都崇文堂明和 5 年刊の求版 朱書入あり 和装 印記:【トウ】謙吉図書印 市島春城旧蔵

再版、嘉永 7 (1854) 年三版) が存在している。なお、上記『補訂版 国書総目録』(岩波書店刊) によると、その他に、『無冤録註』(蘆野東山 (ママ、芦東山: 1696~1776) 著、現存せず。)、『無冤録通』(一冊)(無窮会)、『無冤録略解』(金沢市稼堂文庫) などもあるようである。

・和刻本の方も、九州大学や内閣文庫等多くのところに所蔵されている可能性もあるので、そこらの漢籍目録を見ることも必要であると思われる。

エ 明治期刊行活字本

・『変死傷検視必携 無冤録述 完』(奥付に「警察監獄学会蔵書」とある。発行人: 磯村兌貞、明治 24 年 10 月 23 日刊)

同書は、カタカナを平かなになおし、章立てを施すなど、江戸期版本そのものの復刻ではなく、多少編集されている。なお、矯正図書館本(ネットでの検出題名: 『変死傷検死必携 無冤録述』)の刊行は、明治 34 (1901) 年刊 (326.7-To-7697) とのことであるが未見 (<http://www.jca-library.jp/>)。

オ 昭和戦前期刊行活字本

・尾佐竹猛 (1880~1946) 解題『刑書珍書集 (2) 近代犯罪科学全集 第 14 篇』(「1、無冤録述」、武侠社、昭和 5 (1930) 年 8 月 15 日刊)

(下記『江戸時代犯罪・刑罰事例集 / 佐久間長敬 [ほか著]』、『犯姦集録』及び『刑書珍書集 2 近代犯罪資料叢書 6』の三書は、本『刑書珍書集 (2) 近代犯罪科学全集 第 14 篇』の復刻本である。)

カ 昭和戦後期刊行活字本

・小寺鉄之助 (? ~?) 編著『近世御仕置集成 限定版』(宮崎県史料編纂会、昭和 37 (1962) 年 12 月 25 日刊)(同書は、宮崎県史料編纂会第三集にして、旧延岡藩駒木根文書を輯録したものであるが、冒頭に『無冤録述』を収め、巻頭に、その「三序跋語」の写真版を掲げている。同書については、今般、高塩 博先生の御示教に与った。誌して、深甚の謝意を表するものである。)(平成 22 年 10 月 17 日追加)

・原胤昭 (1853~1942)・尾佐竹猛 (編集)『江戸時代犯罪・刑罰事例集 / 佐久間長敬 [ほか著]』(柏書房、昭和 57 年 3 月? 日刊)(注記: 上記『近代犯罪科学全集』中の『刑罪珍書集 1』、『同 2』(武侠社、昭和 5 年刊)の改題、合本複製、著者の肖像あり。佐久間長敬: 1838~1923)(平成 22 年 11 月 1 日追加)

(<http://www.arsvi.com/b1900/8203ht.htm>)

・尾佐竹猛『犯姦集録』(史録叢書 3、「1、無冤録述」、三崎書房、昭和 47 (1972) 年 11 月 10 日刊。巻末に、紀田順一郎 (1935~)「解説 検屍、裁判、行刑」あり。) ¹⁴

¹⁴ タイトル 犯姦集録 責任表示 編・解題:尾佐竹猛 出版地 東京 出版者 三崎書房 出版年

キ 平成期刊行活字本

・尾佐竹猛解題『刑書珍書集 2 近代犯罪資料叢書 6』（写真印刷、原寸収録。大空社、平成10年8月26日刊）

4 『無冤録述』内容検討

(1) 『無冤録述』緒言その他

・（巻頭序文）「無冤録述」（上記富士川游のいう明和5（1768）年刊『無冤録述』「跋」の再録か？上記『刑書珍書集（2）』に拠る。寛政11（1799）年求版本のものかと思われる。なお、「ㄱ」（活字は取りあえずのもの）は「こと」を示す。）

「無冤録述 斯□（一字空き）邦嚮 [サキ] ニ無冤録ト云ヘル書ヲ印行セリコレ元ノ王氏編輯スル所ニシテ朝鮮国ノ諸学士音註ヲ加フル所ナリ斯□（一字空き）邦ニ翻刻セルハ、何ノ年、何某刻セルト云ㄱ [フコト] 審ナラス且版モ丙王ノ災 [不詳。「火事」のことか。] ニ値 [アヒ] ケルヤ今ハ見ルㄱ 鮮シ頃日ソノ書ヲ知テ求ル人多シ因テコレヲ再印行セント欲ス爰ニ泉南ノ河合某¹⁵ナル者家ニ貽 [ノコ] ス所ノ無冤録述アリ是カノ無冤録の内ニテ斯□（一字空き）邦ニ無用ノㄱヲ除キ捨テ採用ニ便アルㄱヲ挙テコレヲ訳シタル書ナリ是ヲ以テ善価 [ゼンカ] ヲ求ント謀ル然ルニ今ヤ斯□邦律令明正ナンソ此書ヲ借用ヒ玉フㄱ有ンヤ然レドモ [合略仮名] 但 [タダ] 王氏ノ務メアルソノ湮滅センㄱヲ惜ムヘケレハ遂ニ梓ニ繡 [シウ] テ聊且回顧ノ君子ヲ待ト云爾 [シカイフ]

明和五年戊子初秋日 東都 崇文堂識¹⁶

・「無冤録述緒言」（ここは、上記『変死傷検視必携 無冤録述 完』に拠る。版本により多少の異動あり。原文は、「法を説こと」以外の「こと」は合略仮名を使用している。）

「無冤録述緒言 一日我友木氏なるもの元の王氏か編輯せる無冤録二巻を持来て予に示

1972 形態 515p；20cm シリーズ名 史録叢書；3 内容細目 無冤録述、棠陰比事、江戸にて狐附奉行御捌之伝、犯姦集録、御仕置例類集抄、牢獄秘録 入手条件・定価 1900 円 全国書誌番号 72004489 個人著者標目 尾佐竹，猛（1880-1946）// オサタケ，タケキ

¹⁵ 河合甚兵衛尚久は「緒言」では「泉州」の人であるが、ここでは、「泉南ノ河合某」とあり、「泉南」と特定している。河合尚久のこれ以上の人定事項については、現時点では不明である。なお、『国書人名辞典』第1巻（岩波書店、平成5年11月1日刊）530頁「河合尚久」参照。（平成22年11月1日一部修正）

¹⁶ 上述のように、同版序文最後にある「明和五年戊子初秋日 東都 崇文堂識」の「東都 崇文堂識」は、崇文堂が再版の時に入れたものである。序文の文章や「明和五年戊子初秋日」などが初版時のものか。崇文堂とは、前川六左衛門のことである。再版（求版）本書肆が、初版のものに、自分の記名のみをすることは、往々にしてあることである。

て曰此書たる獄事檢驗の法を説こと詳審也且朝鮮の諸文学これに註解せり然るに朝鮮国中華と刑法を同ふすること多し故にかの邦にして通曉して我東邦に解しかたきことも亦鮮からず冀くはこれを訳して当時に採用なるへきことを思ふと因て予其書を留て熟読すれば其上卷は彼邦の刑法を述ること子細にして我東邦の刑法と異なること半に居せり下卷は其辨眩惑關疑似檢驗平正¹⁷ならんことを述たり因て其我東邦に用なきことを省き採用なるへきことをのみ抄出してこれを訳し号て無冤録述と云蓋し竊に述て不作の義に擬せり故に旧本の三序跋語を留て旧本に違背せざるの意を存す猶亦かの邦の刑法を^{たつね}原んと欲する人は原本に就て求め玉へとのみ

元文改元 [1736 年] 丙辰夏四月¹⁸

泉州 河合甚兵衛源尚久識

(2) 掲載序文

「新註無冤録序」（朝鮮本、漢文、ここでは未入力）、「新註無冤録序」（朝鮮本、漢文、ここでは未入力）、「新註無冤録序」（朝鮮本、漢文、ここでは未入力）、「新註無冤録跋」（朝鮮本、漢文、ここでは未入力）

5 『無冤録述』諸版検討

・nacsis webcat: <<http://webcat.nii.ac.jp/>> 掲載分

『無冤録』: 19 件 <<http://webcat.nii.ac.jp/cgi-bin/krkproc>>、なお、ここに、『増修無冤録諺解』（影印、ソウル・弘文閣、1983 年 12 月刊。原本は、正祖 16 (1792) 年刊か?）等「諺解」なるものが記載されているが、「諺解」の意味については、例えば、金文京（1952～）『漢文と東アジア—訓読の文化圏』（岩波新書、平成 22 年 8 月 20 日刊）96、97、105～108 頁等参照。

¹⁷ 「其辨眩惑關疑似檢驗平正」似可斷句為：其「辨眩惑，關疑似，檢驗平正」。意指：其「辨明疑惑，釐清容易混淆之事，檢驗公平正直之事」。又，經上網查看，得知國家圖書館藏有（元）王與撰「無冤録」（台南：莊嚴文化，1995 年）及（元）王與撰，楊奉琨校注「無冤録校注」（上海：科學技術，1987 年）二書。「下卷は其辨眩惑關疑似檢驗平正ならんこと述たり」（其辨眩惑關疑似檢驗平正）は、「其辨眩惑，關疑似，檢驗平正」（其れ眩惑を辨じ、疑似を關（ひら）き、檢驗の平正ならんことを。）で、「下卷は、疑わしきを解き明かし、はっきりしないことを明らかにし、調べが公正であることを述べている。」の意か。なお、これは、作者の作った文なのか、あるいは、原文にある文をここにもってきたものかは、現時点では不明。この他、前掲小寺鉄之助編著『近世御仕置集成 限定版』（宮崎県史料編纂会、昭和 37 年 12 月 25 日刊）1 頁は、「下卷ハ其弁、眩惑關疑似 [げんわくぎじをひらき]，檢驗平正ナラン事ヲ述 [のべ] タリ」とする（小寺鉄之助部分のみ、平成 22 年 10 月 17 日追加）。

¹⁸ 識者によれば、「改元」の文字はほとんどの場合は入れない由。なお、旧暦では、四月～六月が夏で、四月は現在の五月中旬に当たる。

『無冤録述』：10 件 <<http://webcat.nii.ac.jp/cgi-bin/krkproc>>

- ・ 翻訳：元文改元（1736）年丙辰 4 月：「無冤録述緒言」：泉州 河合甚兵衛源尚久識
- ・ 開版：明和 5（1768）年。

・ nacsis webcat <<http://webcat.nii.ac.jp/>>

「無冤録述 / 河合尚久編訳<ムエンロクジュツ>. -- (BA4143286X) 東都：丹波屋理兵衛, 明和 5 [1768] 2 冊；27cm -- 卷之上;卷之下 注記：責任表示は緒言による；和装；上[24]丁，下[39]丁 ISBN: (卷之上)；(卷之下) 別タイトル：無冤録述, 2 巻 著者標目：河合, 尚久<カワイ, ナオヒサ> 分類：NDLC：HB68；NDLC：SC831；NDLC：SC851」

- ・ 早稲田大学古典籍総合データベース

<<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>>

『無冤録述（卷之上下）』（寛政 11（1799）年版本）

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/wa04/wa04_01597/>

（請求記号：ワ 04 01597 出版書写事項：寛政 11[1799] 松村九兵衛, 浪花（大坂）形態：2 冊；25cm 序題：新註無冤録 序：山叟ほか 東都崇文堂（??）明和 5 年刊の求版 朱書入あり 和装 印記：【トウ】謙吉図書印 市島春城旧蔵）

- ・ 千葉大学附属図書館亥鼻（いのはな）分館古医書コレクション

<<http://kintou.ll.chiba-u.ac.jp/~koisho/index.html>>

『無冤録述（卷之上下）』（嘉永 7（1854）年版本）

<http://kintou.ll.chiba-u.ac.jp/~koisho/74681/lime_page/74681_027.html>

<http://kintou.ll.chiba-u.ac.jp/~koisho/74682/lime_page/74682_001.html>

（無冤録述 / 河合尚久編訳<ムエンロクジュツ>. -- 補刻. -- (BA41449228) 浪花：松村九兵衛, 柳原喜兵衛 嘉永 7 [1854] 2 冊；26cm -- 卷之上;卷之下 注記：責任表示は緒言による；和装；初版：明和 5 年（1768）；上[24]丁，下[39]丁 ISBN: (卷之上)；(卷之下) 別タイトル：無冤録述, 2 巻 著者標目：河合, 尚久<カワイ, ナオヒサ> 分類：NDLC：SC831；NDLC：HB68；NDLC：SC851）

- ・ 国立国会図書館所蔵本

原本代替請求記号 YDM60953 (マイクロフィッシュ)

タイトル 変死傷検視必携無冤録述 責任表示 王東甌 [マ、王與] 編 責任表示 河合尚久訳 出版地 東京 出版者 磯村兌貞 // イソムラ ダテイ 出版年 明 24.10 形態 120p；19cm

- ・ 現代中国、台湾刊本

経上網查看，得知國家圖書館藏有（元）王與撰「無冤録」（台南：莊嚴文化，1995 年）及（元）王與撰，楊奉琨校注「無冤録校注」（上海：科學技術，1987 年）二書。

6 『無冤録述』関連著作抄

・天野義幸（1923～）『検察庁の証拠品』（高文堂出版社、平成2年3月18日刊）14、15頁

・川田弥一郎（1948～、名大医卒）『江戸の検屍官 北町奉行所同心北沢彦太郎謎解き控』（祥伝社、平成9年1月20日刊）

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B7%9D%E7%94%B0%E5%BC%A5%E4%B8%80%E9%83%8E>〉

・川田弥一郎（1948～）『江戸の検屍官 闇女』（講談社、平成12年11月15日刊、2,000円＋税）（平成22年10月23日追加）

・川田弥一郎『江戸の検屍官 女地獄』（時代小説文庫、角川春樹事務所、平成13年11月18日刊、667円＋税）（平成22年10月23日追加）

・氏家幹人（1954～）『大江戸死体考 人斬り浅右衛門の時代』（平凡社新書、平成11年9月21日刊）（「無冤録述」を見るべし」：29～33頁）

・和久田正明（1945～）『火の牙：八丁堀つむじ風』（廣済堂出版、廣済堂文庫、特選時代小説、平成18年7月1日刊）（第2話「無冤録述」82～155頁）

7 その他（HP、漫画、韓国ドラマ等）

・HP「花のお江戸の若旦那」中「平成22年6月4日 無冤録述」（平成22年10月5日追加）

〈<http://ameblo.jp:80/wakadanna2009/entry-10554193612.html>〉

・『ビッグコミック』（漫画誌、小学館刊）所載「江戸の検屍官」（平成22年10月17日庄司末光先生の御教示に拠る、未見（その後実見す。）。平成22年10月24日現在ネット確認。上記「6 『無冤録述』関連著作抄」参照。）（「時は江戸、北町奉行所同心の北沢彦太郎。他の同心たちが嫌がる検屍に情熱を傾け、死者たちの無念の声を聞く。江戸川乱歩賞受賞の川田弥一郎（1948～）の原作を、『公家侍秘録』の高瀬理恵、原作／川田弥一郎がコミック化!!」

〈<http://big-3.jp/bigcomic/rensai/edo/index.html>〉）（平成23年10月23日追加）

・その後、上記『ビッグコミック』既連載のものを収録した『江戸の検屍官』（ビッグコミックス〔スペシャル〕）1（小学館、平成22年12月25日刊）、2（小学館、平成23年8月30日刊）、3（小学館、平成24年8月30日刊）が現在刊行されている。また、『ビッグコミック』にも、断続的に短期集中連載あり（例えば、平成25年2～3月分にも連載中。）。（平成25年3月5日追加）

〈<http://www.amazon.co.jp/%E6%B1%9F%E6%88%B8%E3%81%AE%E6%A4%9C%E5%B1%8D%E5%AE%98-1-%E3%83%93%E3%83%83%E3%82%B0-%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B9%E3%80%94%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%AB%E3%80%95-%E9%AB%98%E7%80%AC/dp/409>〉

1836089)

〈<http://big-3.jp/bigcomic/rensai/edo/index.html>〉

・韓国: 『増修無冤録』を題材とした韓国ドラマ『ピョルスンゴム (別巡検)』 (2005 (平成 17 年) 年制作、DVD BOX 韓国版) がある。

〈<http://store.shopping.yahoo.co.jp/scriptv/srt8454.html>〉

〈 <http://www.yesasia.com/global/%E5%88%A5%E5%B7%A1%E6%A4%9C-mbc%E3%83%89%E3%83%A9%E3%83%9E-%E9%9F%93%E5%9B%BD%E7%89%88/1010005113-0-0-0-ja/info.html>〉

・韓国: 『無冤録』 (『新註無冤録』か?) を題材とした韓国ドラマ『大王世宗 (テワンセジョン)』 (2008 (平成 20 年) 年制作、第 75 話。世宗: 1397~1450) がある。

〈<http://r35diary.blog4.fc2.com/blog-entry-800.html>〉

【附録】 明治警察史コーナーHP 項目一覧 (抄) (令和 4 (2022) 年 8 月 8 日追加)

・「法制史学者著作目録選」中「明治警察史コーナー」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

・「松井茂久『警官陶冶篇』研究史抄一本 HP 収載「PDF 版松井茂久『警官陶冶篇』検討資料」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/matsui002.pdf>〉

・「PDF 版松井茂久『警官陶冶篇』(増訂三版、明治 25 (1892) 年 2 月 18 日刊)」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/matsui001.pdf>〉

・「大森鍾一『直興遺篋抄』—「長男仕官に就き与へたる訓戒の書」—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/omori001.pdf>〉

・「川路大警視青山墓前の頌徳碑検討一斑 (碑文全文、付句読点文、書下し文)—故陸軍少将兼大警視正五位勲二等川路君墓表編修副長官従五位重野安繹撰— 一明治警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kawaji002.pdf>〉

・「佐和正関係文献抄—明治警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sawatadashi.pdf>〉

・「坂元純瀨、國分友諒両氏の墓所について—中原英典氏のお問い合わせを追って—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakamoto001.pdf>〉

・「国分友諒顕彰碑について—原田弘先生のお教えに接して—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kokubukenshoi.pdf>〉

・「篠崎五郎関係資料抄—台湾出兵時の徴集隊指揮副長の一人— 一明治警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/shinozaki.pdf>〉

・「後藤松吉郎とは誰ぞ—明治警察史・日本統治下台湾警察史の一齣—」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/goto001.pdf>〉

- ・「裁判医学校乃至警視医学校関係文献一斑—明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/saiban001.pdf>〉
- ・「『無冤録述』検討一斑—江戸期及び明治警察史の一齣—」（本稿）
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/muenrokujutsu.pdf>〉
- ・「続・『無冤録述』の初歩的検討—江戸期及び明治警察史の一齣—」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/muenrokujutsuzoku.pdf>〉
- ・「ヘーン大尉関係文献抄（再訂稿）」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/hoen001.pdf>〉
- ・「高橋雄豹博士著作目録（再訂稿）」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/takahashi001.pdf>〉
- ・「田村豊氏著作目録」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/tamura001.pdf>〉
- ・「中原英典氏明治警察史研究関係著作目録抄（参考）渡辺忠威氏警察史関係文献抄」
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nakahara001.pdf>〉

【関連事項】（令和4年8月8日追加）

- ・法制史学会： 〈<https://www.jalha.org/>〉
- ・国立国会図書館： 〈<https://www.ndl.go.jp/>〉
- ・国立国会図書館デジタルコレクション 〈<https://dl.ndl.go.jp/>〉
- ・国立国会図書館個人向けデジタル化資料送信サービス（個人送信）（令和4（2022）年5月19日開始）
〈https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html〉
- ・国立国会図書館次世代デジタルライブラリー（令和4（2022）年4月1日追加）
〈<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>〉
- ・CiNii： 〈<https://ci.nii.ac.jp/>〉 ⇒ 〈<https://cir.nii.ac.jp/>〉（**【[2022] 4/18 更新】**CiNii ArticlesのCiNii Researchへの統合について）、〈<https://ci.nii.ac.jp/books/>〉

（了）